

医療保険に個人年金保険、 世界市場への進出

—新たなチャレンジの時を迎える 生命保険業界—

理系にとって、金融業界は縁遠い世界かもしれない。
しかし、金融業界にも確かに理系の人材を求める職場がある。
金融業界でなぜ理系が積極採用されているのか、
金融業界内のいくつかの業種別にその理由を解き明かしていこう。
まず取り上げるのは、生命保険業界。
この業界はそもそも生命保険という商品開発をする上で、
アクチュアリーという理系の専門職が居なくては話にならない。
第一生命保険株式会社の庄子浩主計部長に伺った話を基に、
生命保険業界の歴史や今後の展望に触れながら、
理系の活躍する職種について説明していきたい。



生活者の不安・リスクに 備えるため生み出された 「保険」という仕組み

一家の大黒柱が倒れたら、残された家族はどうなってしまうのか——。生命保険は生活者が不安に感じるそんなリスクに備えるために誕生した。

日本で生命保険が広まったのは明治以降。それまでも誰かが亡くなった時、残された家族に集めたお金を支払う共済のような制度はあった。だが、科学的に考えられた仕組みではなく、若者も老人も同じ額を負担したり、いざという時に十分な支払い金を準備できなかったりと上手く機能していなかったようだ。

生命保険が秀逸なのは、年代別の死亡率などの統計データを考慮して、何十年先も健全に運用できるような商品設計されているところだ。年齢に応じて適切な負担金を支払ってもらい、集めた資金を運用して利益を得て、不幸があった時には約束した額を遺族に支払う。そのためには、統計や数理に強い専門家が不可欠。近代的生命保険の誕生当時から、理系出身の「アクチュアリー」

という職種が活躍している。

ただ、明治のころは投機的な生命保険会社も存在し、社会問題となっていた。そのような中、明治35年（1902年）9月に創業したのが、生命保険業界の仕事について今話を聞かせてくれた第一生命保険だ。保険契約者に会社の構成員として加入してもらい、剰余金のほとんどを契約者に還元する、日本初の「相互会社」として同社は設立。「契約者第一主義」を経営理念として掲げて、生命保険をめぐる生活者の不安を払拭することに努めた。その姿勢が生活者からの支持を集め、国内有数の生命保険会社として飛躍したのだ。

生活者が不安に感じる点は、時代とともに変化してきている。日本社会の高齢化が進み、共働きが広まってきた現在、生活者にとってのリスクは働き盛りの家族が死亡した時だけではなくなってきた。老後の生活設計や、ガンなどで入院生活が続くリスクも大きな不安材料になってきている。

時代の変化を受け、生命保険会社の役割も変わりつつある。従来、取り扱う商品は死亡保険中心だった

が、最近ではガン保険などの医療保険や、個人年金保険なども扱うように。第一生命保険でも「生涯のパートナー」という理念のもと、生活者の生涯設計を支援して、安心した生活を送ってもらえるように注力している。

生活者の感じている不安・リスクに対して、保険という仕組みでどうやって安心していただけるようになるか。それが生命保険会社の役割なのだ。

生命保険大国・日本から事情・法律も異なる世界への挑戦

日本は生命保険の加入率が非常に高く、世界有数の生命保険大国と言われている。非常に大きな市場が日本にはある反面、医療保険・個人年金保険を除くと、日本市場の伸び代は限られている。企業として成長を図るには、海外市場への進出が欠かせない状況だ。

第一生命保険も、ベトナム、タイ、インド、オーストラリアに進出。特にベトナム、オーストラリアでは買収した会社を100%子会社化。前年比33・7%増(ベトナム)、27・5%増(オーストラリア)で売上を伸ばし

ている。

ただ、国が変われば事情も法律も変わる。世界的に見ても長寿国である日本とは、年代別の死亡率も違う。それぞれの国で生活する人たちの不安・リスクに対して、適切に設計した保険商品を提供しなくてはならない。異なる環境の中、新たなチャレンジとして、保険事業を構築していく機会が、生命保険会社には増えているのだ。

日本国内では生活者の老後・医療のリスク・不安に備える新たな保険商品を提供し、世界では生命保険大国・日本で鍛えた力を武器にして戦っていく——。新たなチャレンジの時を迎えた生命保険会社。その変化を体現した出来事の一つが、第一生命の株式会社と東証1部への上場だろう。より柔軟に事業展開できるようにすることで、これからの時代を乗り切っていく構えだ。

生命保険会社の大事な業務を任されるアクチュアリー、クオンツという仕事

そんな生命保険会社の仕事を見てみると、重要なところで理系の

専門職が存在感を示していることが分かる。

前述のように保険会社という仕組みを機能させるためには、アクチュアリーという保険数理の専門家が欠かせない。保険商品が破綻せずに保険金支払いを全うできる設計になっているかという、保険数理に関する内容について担当することはもちろん、保険制度を運営するためのシステムは構築できるのか、販売成績に応じて営業職に適切な報酬を支払えるか、と生命保険会社の保険販売に関する一連の業務にも携わっている。

さらには、会社の財務の健全性を確認するのもアクチュアリーの仕事。会社には保険金支払いに十分な量の準備金があるか、年度末あるいは来年度の決算時には自社の財務状況はどうなるか、と見通しを立てて、企業経営のコアな部分を見ていくこともアクチュアリーにしかできないことだ。

また生命保険会社は、将来の保険金支払いのために、保険契約者からいわば預かっている資産をそのまま眠らせているわけではない。運用して利益を上げているわけだが、ここ

でも「クオンツ」という専門家が資産運用の重要な役割を担っている。資産運用のために、クオンツは金融工学に基づいた運用モデルを開発。長期的・安定的に収益が出せるように、数理的な視点から適切な運用方法を考えているのだ。

何十兆円という資産を預かり、何十年にもわたって生活者のリスク・不安を安らげる。そんな役割を担っている生命保険会社で活躍するアクチュアリーとクオンツという職業。日ごろ、どのような業務に取り組んでいるのか、次ページからは一線で活躍する先輩社員から聞いた話を紹介していこう。

プロフィール

第一生命保険株式会社 主計部長
庄子浩(しょうじょうひろし)
日本アクチュアリー会 正会員



アクチュアリー

「商品開発、財務健全性の評価、経営への提言と、会社の根幹を見る」

商品開発と財務健全性の評価。

アクチュアリーの大きな二つの仕事

アクチュアリーの仕事には、大きく二つの流れがあります。

一つは商品開発の支援。商品開発の担当者とアクチュアリーが表裏一体になって進めていきます。どのような商品にするのか、企画・概要を詰めるのと同時に、数理の面でどのように実現することが出来るのかアクチュアリーが数理的な設計を行います。

会社の最終的な目標は、保険金支払いなどの保険商品で約束するとおりのことが事務システムとして実現でき、営業担当がお客様に商品内容を説明してより多くのご契約をいただくこと。商品開発の担当者が営業担当者に商品内容を分かりやすく伝えるとともに、商品の収支バランスを考慮し、営業担当者の販売成績に応じて支払う報酬の枠組みを考えるのもアクチュアリーの役割です。

保険数理の観点から保険商品の仕組みを考えるだけでなく、その仕組みを実現できるように一連の業務の流れの組み立てにも加わっていく。それがアクチュアリーの仕事です。

もう一つの大きな仕事は、会社の健全性を見ることです。第一生命保険の総資産は30兆円。それだけの資産ですから、簡単に動かすことはできません。大きな船みたいなもので、舵を切ったからといって、すぐに進む方向を変えられるわけではないのです。だからこそ先を読み、この先何が起きるのか、予測しなくてはいけません。

具体的には、四半期ごとに、現在の事業の状況を踏まえて、年間の決算はどうなるかとレポートする仕事があります。そして、将来の保険金を支払うために十分な量の準備金を用意できているか、将来の財務状況を踏まえて会社としてどんな行動計画を立てなくてはならないかと経営企画にかかわる提言をしていくのもアクチュアリーの重要な仕事なのです。

社会の動きに対応する会社の動き。それがまさに目の前で展開される。

生命保険という商品の性格上、お客様とのお付き合いは非常に長くなります。会社の経営には長期的な視点が必要です。保険商品の設計をするにしても、数十年先でも保険金をお支払いできるように

に考えておかないといけません。お客様と一度お約束した内容を何十年も守ることになるわけですから、しっかりと先を見据えて考える必要があるのです。

アクチュアリーとして働いていると、会社の大きな動きを近いところで目にする事ができます。私が経験した話になりますが、第一生命保険に入社後、金融ビッグバンがありました。ソルベンシー・マージン規制や、金融商品の時価会計などの新たな制度が導入されることになり、私も新制度導入に対応する業務に携わったのです。

世の中の動きに対応するため、会社があるような動きをしているのか。まさに目の前にその現場があり、自分が直接携わることが出来るわけですから、非常にやりがいを感じましたね。もちろん、責任も重くなるのですが、その分やりがいもあって、面白いわけです。

アクチュアリーは「専門職」だが専門領域以外にも関心を持って

アクチュアリーの仕事には、確かに数学・理系の能力が必要になります。ですが、大学院などで学んだ内容が、そのまま実際の業務に直接結びついているわけではありません。ただ業務上、保険数理的な内容を考える場面が多く、その際に

は論理的な思考力が必要になります。理系として鍛えた論理的に考える力が共通の土台となり、業務で活かされていると感じています。

アクチュアリーは「専門職」です。ほかの人にはマネできない専門性を持っていることは間違いありません。ですが、専門領域のことだけを考えていてはいけません。当社は、日本有数の機関投資家として会社の資産を運用しているわけですから、株式や為替相場が変動すれば会社への影響は大きくなります。金融機関で働く以上、経済新聞を毎日読むことはもちろん、専門領域以外にも関心を持つことが大切でしょう。

さらに言うと、当社の直近の動きとして相互会社から株式会社になりました。今後事業を進めていく上で、必要とされる環境を整えたのです。これからは海外での事業も広がってきます。当社には創業時からアクチュアリーがいました。海外で事業をするにも、国ごとにアクチュアリーが必要。海外で活躍できるチャンスが多くなる分、語学力もしっかりと身に付けておいてほしいと思います。

プロフィール

第一生命保険株式会社 主計部長

庄子浩(しょうじひろし)

日本アクチュアリー会 正会員

クオンツ(バイサイド)

約30兆円もの資産を運用する舵取り役

バイサイドクオンツとして、約30兆の資産を長期安定的に運用するために不可欠なALMモデルを開発

我々は、「バイサイドクオンツ」として運用戦略策定から運用実施、運用評価に至るまで、様々な運用プロセスに関わり、金融工学を軸に、さまざまなコンサルティング、モデル開発を請け負っています。

我々「バイサイドクオンツ」に対し、証券会社などで働くクオンツは「セルサイドクオンツ」と呼ばれています。セルサイド・バイサイドの違いはシンプルに言えばリスクを保有するかしないか、バイサイドは、リスクを保有(Buy)し、その果実としてリターンを享受するわけです。特に、生命保険会社の場合、事業の性格から5年〜10年といった長期的な視点で安定的に資産運用収益を積み上げていくことが求められます。

運用投資期間が長期になればなるほど不確実性が増し、理論だけですべてを説明するのは難しくなっています。クオンツとして業務を行うには、理論を学ぶだけでは不十分で、現場での経験知、例えば、実際に市場に對峙しているポートフォリオマネージャー・ファンドマネー

ジャー等の過去の経験や、相場に對する見識等を分析やモデルに融合していくことも求められてきます。理論だけでなく、実務知識も併せて持つていなければ成り立たない仕事なのです。

第一生命の総資産は約30兆円。中長期的視点で、どう運用していくのか、その運用戦略を決定する上で、我々の開発したALMモデルがなくてはならないものとなっています。このモデルも、資産運用部門と共同で、何年もかけてブラッシュアップ・熟成させてきたものです。

クオンツの業務はさまざま。運用モデルの開発以外に保険商品の開発に携わることも

当社のクオンツの業務として、資産運用業務への関わりについて挙げましたが、リスク管理や保険商品の開発等、クオンツの業務範囲は相当広がってきています。

私自身、変額年金保険の商品開発に關われたことが印象に残っています。変額年金は運用益に応じて支払う年金額が変わる商品で、基本的には投資信託に近いのですが、運用益を上げられなかった時にも最低限の額を支払う最低保証がある

のが特徴です。この最低保証を付していることは、言ってみれば、投信を原資産とするブットオプションをお客様に売っていることになるのです。そのオプションの価格を決定(プライシング)する際に、金融工学の技術が必要になるわけです。

商品開発にもクオンツの技術が活かされていることにやりがいを感じますし、実際に商品が世に出ることで、商品開発にかかわった一員として達成感を味わうことができました。

当社のクオンツ出身者は、資産運用部門、リスク管理部門、企画部門や商品開発部門など様々な部署で活躍しています。クオンツは専門職ではありますが、第一生命の中で活躍するフィールドが幅広くあるのも魅力だと思えます。

長期的なスパンで取り組む仕事。

研究者的な能力と姿勢が必要に

クオンツの仕事は、数カ月から長いものでは1年や2年というより長期的スパンで取り組むことが多いです。案件にもよりますが、分析やモデルの開発に相当程度の時間が充てられます。

仕事の性格上、研究者的能力、すなわち、論理的思考力、探求心や向上心、あきらめず前向きに粘り強く取り組む姿勢

が求められます。仮説を基にモデルをつくっても、すぐにうまく当てはまらないことが多く、どこに問題があるのか原因を究明し、改善策を考え試す、というトライアンドエラーを繰り返し、ベストなものを作りあげる作業が必要です。口ジツク立てて物事を考える力と粘り強さが必要なのです。

その意味で、クオンツという仕事は理系の人に向いていると思います。理系の強みである論理的な思考力を活かせる仕事として、適しているのではないのでしょうか。また、仕事への取り組み方も、どちらかと言うと、日々、目の前の仕事への対応に追われるというよりは、じっくりと考えながら自分のペースで進めるといった性格の仕事です。そうした仕事の進め方が好きな人にとっても、居心地が良い仕事だと感じてもらえるはずですよ。

プロフィール

みずほ第一フィナンシャルテクノロジー株式会社
(出向)金融保険工学第1部長
鎌 義隆(つるぎ・よしただ)

